「潜在創作」とは何か

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 将久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16416

【特集　かく】

「潜在創作」とは何か

鈴木　将久

現代中国文学研究に「潜在創作（原文：潜在写作）」という概念がある。いうなれば、潜在的な状態において「書くこと」である。「書く」という行為が、言表と言われるように、言葉を表に現して、他者にとどけることを目的とした行為であるとするならば、公開を前提とせず、潜在的な状態において書きつづける「潜在創作」は、ほとんど語義矛盾に近い。公開のためではなく「書く」とは、何を意味するのだろうか。

この概念を提起した陳思和氏によると、中国の「潜在創作」には以下のいくつかの種類があるという。

一、書信、日記、読書メモ、思考ノートのような個人的な文字資料。「作者の最初の目的が公開発表のためでないことは明らかだが、その「潜在的な」意義は、これが文学創作でないにも関わらず、潜在的な文学性をおびているところにある。ある種の特殊な環境下において、こうした文字資料は文学作品として公開して発表される」[1]。この種類は、大作家の書信や日記などが公開されることからも、容易に理解できるであろう。

二、自覚的な文学創作作品。「なんらかの原因により、当時発表できなかったもの。つまりいわゆる引き出しにしまわれ、数年後に公開して発表されたもの。〔中略〕いま「潜在創作」現象を提起するのは、こうした作品をもとの年代にもどして考察するためである。公開して発表されず、したがって客観的な影響力は発揮しなかった

が、当時の知識人の厳粛な思考を反映しており、当時の精神現象の無視できない有機的な一部分である」[2]。当時発表できなかった原因として、中国現代文学の分野で考えられるのは、検閲など権力による規制である。とくにこの概念は、毛沢東時代の厳しい思想統制を念頭において提起されている。すなわち毛沢東のイデオロギー統制のもと、同時代的には発表され得なかった作品を、当時の状況にもどして考察することが提起されている。

三、五〇・六〇年代の旧体詩など、非正規ルートを通じて伝播したもの。「当時は発表されなかったが、友人のあいだで流通し、詩人が逝去したあと公開して発表されたもの」[3]。

四、民間の刊行物あるいは自費出版の形で世に出たもの。三と四も、毛沢東時代の思想統制が念頭におかれている。

補足すると、毛沢東の時代はイデオロギーの統制が厳しく、共産党によって非合法と認定された文章は、公式のルートで出版されることはなかった。しかし同時に、毛沢東時代は、地下もしくは半地下の思想活動が、きわめて盛んな時代でもあった。公的イデオロギーと、政府に対抗する「民間」の思想活動の関係は、じつはかなり複雑である。銭理群『毛沢東と中国』によると、毛沢東自身が、制度化された官僚組織への反抗をしばしば呼びかける指導者であり、毛沢東に応える若者が、往々にして、政府に対抗する「民間」思想家になっていった[4]。毛沢東は一方で厳しい統制を行いながら、同時に政府に対抗する活動をなかば無意識のうちに鼓舞していた。毛沢東のイデオロギー統制と「民間」の思想活動は、相補的関係にあったとすら言えるだろう。こうした情況下で、創作されたものの発表されなかった作品、友人たちのあいだでのみ流通した作品、あるいは自費出版として出された作品が現れた。つまり中国共産党によって公式には認められなかったが、公式イデオロギーと相補的関係にあるという意味において、時代を映す文章として決して無視できない存在が、中国現代文学でいう「潜在創作」の中核部分である。

かくして「潜在創作」を分析することは、中国現代文学史を全体として捉えるために必須の作業になる。陳思和氏は、「潜在創作」を前面に打ちだし、中国文学史をラディカルに構想した。ただしここで考えたいのは、文学史の完成ではない。むしろ「潜在創作」という行為の意味である。彼らが、公開が望めない情況下で、それで

も書きつづけたのはどうしてなのか。彼らが遂行した創作行為は、何を意味したのか。それは「書く」という行為について、新たな思索を導くものなのか。

具体的な事例を見てみよう。まず陳思和氏が三番目にあげた旧体詩を見てみる。旧体詩とは、伝統的なスタイルにのっとり、押韻や平仄などルールを遵守して書く漢詩である。まがりなりにも封建文化の打倒をかかげた社会主義の時代に、旧来の文のスタイルの極致と言うべき旧体詩が書かれたことは、それ自体奇妙である。

この旧体詩を書いた人に、胡風という文学者がいる。彼はもともとマルクス主義文芸理論家として活躍したが、毛沢東に容れられず、「反革命」の冤罪を受け、牢につながれた。[5] 胡風と毛沢東の関係は複雑である。主張の違いについて言うと、胡風が、マルクス主義世界観を受け入れる際の知識人の認識の変容過程を重視し、いかにして世界観を変容させるかを理論的に追求したのに対して、毛沢東は運動としての革命論を重視し、いかにしてマルクス主義の旗の下で革命を組織するかを重視したと言える。両者ともマルクス主義者を自任しており、原理的には共存不可能ではなかった。ただ諸々の事情が重なり、結果として胡風は毛沢東に徹底的に弾圧されることになった。

胡風は、獄中、あるいは弾圧を受けた状況下で、旧体詩を書いた。しかし彼は自覚的には、終生マルクス主義文芸理論家であった。マルクス主義者の自覚を保持したまま旧体詩を書くことは、何を意味しているのか。一九六六年五月、一瞬だけ獄外に出ていたときの詩に次のようなものがある。[6]

沈冤大案定重提　深い冤罪の大事件、定まったのち再びあげられる
可早雖然也可遅　早いというべきなれど、また遅いというべし
敢任権威誣托特　敢えて権威がトロツキー・特務と濡れ衣を着せるに任せ
羞凭利勢寄安危　利益や勢いにもたれて安全と危険を寄せるを羞じる
凌烟綉像羞加我　雲をしのぐ〔高遠な〕人物画に我の加わるを羞じ
蹈水銷形敢讓誰　水の中で形を失う、あえて誰に譲ろうか
永謝先師垂大訓　永遠に謝する、先師が大いなる訓を垂れて

堅持韌性学青皮　粘り強さを堅持してゴロツキに学ばしめるを

このとき胡風は、おそらく獄外に出ていたためか、希望的観測をもち、自分の冤罪事件が再審査されることを期待していたようである。胡風は一貫して、毛沢東が自分を理解してくれると信じていたふしがあり、他方で毛沢東の周辺の権威的人間に嫌悪感をあらわにしていた。この詩でも権威による胡風に対する濡れ衣を風刺している。ちなみに毛沢東時代には、トロツキー派あるいは蔣介石の特務というのは、それ自体の意味をほとんど問わずに、反対派に着せられるレッテルであり、胡風も、内実のないまま、トロツキー派および特務と言われた。また「勢いや利益」、「雲をしのぐ人物画」といった表現も、基本的には権威に群がる人間への嫌悪を示したものと言える。「蹈水銷形」とは、野に隠れることであり、これも権威に寄生する人間への風刺と受け取れる。胡風が、獄中生活を経てもなお、権威主義への批判精神を失わなかったことが見て取れる。第七句の「先師」とは魯迅のこと。胡風は魯迅の弟子を自任し、魯迅精神の継承を重視していた。魯迅の教えにしたがい、ゴロツキに学ぶくらいの気持ちで、粘り強い戦闘精神を保ち続けると宣言している。

実際には、この詩が書かれたほぼ同時期に、文化大革命が発動され、その中で胡風は再度獄中に送られることになる。したがってこの詩の希望的観測は、予測としては誤ったことになる。問題は、彼が弾圧を受けた状況下で、なお希望を持っていたとき、それを旧体詩で表現したことの意味である。じつは胡風は、獄中でも旧体詩を書いていた。旧体詩はルールが煩瑣であり、高度な教養が求められた。だからこそ共産主義イデオロギーのもとでは、一部の知識人による文化支配の象徴として排斥された。しかし逆から言うと、ルールを会得している人にとっては、むしろ記憶の容易なスタイルとなる。胡風はルールを会得していたため、獄中で筆や紙が制限され、自由な表現が許されなかったとき、旧体詩ならば記憶できたという。

胡風は、自覚的にはマルクス主義者であり、マルクス主義を会得するための精神の作用を理論的に突き詰めようとした文学者であったが、他方で、マルクス主義者になる前は、旧体詩の作法も身につけた知識人であり、弾圧されて文章の公開が望めない状況下において、いわば地の部分が表出するように、もともとの教養が示された

と言えるだろう。もちろん胡風の旧体詩の意味を単純化することは戒めなければならない。胡風の境遇は不条理にほかならず、その中でなおもマルクス主義への信仰を失わなかった彼の精神の強度は、ほとんど想像を絶するものがある。旧体詩も、そうした精神の強度のもとで現れたものであり、単純な復古と考えてはならない。ただ、それを踏まえたうえで、彼が不条理に耐えながら希望を保ち続けたとき、それを表現する手段が旧体詩であったという事実は興味深い。公開の文章が書き得なかったとき、自らの心情を迂回して表現する手段として、社会主義によって表面的には抑圧されたはずの文章スタイルが、呼び起されたと言えないだろうか。言い換えるならば、ここでいう「潜在」とは、当時の状況下で公開できないという意味での「潜在」であると同時に、当時は抑圧されていた文章スタイルという意味も含む、二重の意味での「潜在」であった。

陳思和氏が提起する「潜在創作」は、政治的迫害を受けた人だけを指すのではない。この概念は、政治の喧騒を離れて個人的な世界に沈静した人の創作活動も含んでいる。その事例として、灰娃という詩人を見てみよう。(7)

灰娃は毛沢東体制下の中国の現実に適応できず、軽度の精神分裂症を患ったという。文化大革命がはじまると、精神分裂症が悪化し、日々、恐怖と不安ばかり感じていた。そうした中、一九七二年、書きとめた文章が偶然彼女の夫の目に触れ、「詩」として残された。おそらく文革中の中国では認められないと思ったため、厳重に隠し、文革が終わった後に公表したという。彼女が一九七二年に書きのこした作品を見てみよう。

ああ　時間の重みが／私たちの腰をゆがめる／あの一瞬の笑い一筋の灯火よ／流星が流れ去り　ただ聞こえる／遠い夢のこだま／波しぶきがはね／塩味が沈殿する／／私たちの霊魂は／毒炎に焼き焦がされ／煙は幻想的に／膝行して前に進み／とうとう／苦笑さえ　も／嫌になった／／ああ　黙して語らぬ霊魂／以前／私たちはかって／手をたずさえ向き合って泣きじゃくった／互いにたがいの傷を押さえた／灰色の幕　で／悲痛な気持ちを覆い／〔中略〕／運命の風波　奇怪な苦しみ／心身を葬る渦巻きへと私たちを押しやり／むせび泣きとうめき声で押韻し唱和する／私たちの腕を　人は情熱がこもっていると言う／私たちはこの世をさまよい苦しみをきつく抱きしめ／通りすがりの者はこの大いなる悲壮を

／この隠れた痛みを　軽く笑い雑談する[8]

この詩に当時の中国の抑圧された社会心理を読み込むことは、もちろん可能である。強力なイデオロギー統制のもと、建前のスローガンを唱和することが強いられ、個人の自由な思考が許されなかった痛みを表現していると読める。さらに、そうした非人間的な世界において、なお人間の情熱を保つことへの希求を表現しているとも言えるだろう。表面的には政治から身を離し、個人の精神を追求することによって、毛沢東時代の政治主義の非情さを浮かび上がらせた創作と読解しても間違いではない。

ただ、彼女自身の言によると、これは、精神分裂に陥った状態下で、「氷の洪水が心の堤防をあふれでるように、知らず知らずのうちに手が動き、手近な紙に書きつけた。一文、二文、半言、一段、一言、一文字」[9]と書かれたものだという。いわばシュールレアリストの自動筆記のように、意識の外にある言語がなかば自動的に浮かび上がって生み出されたのが、この創作だという。灰娃は無意識のうちにシュールレアリスムを実践したとも言える。したがってここから読み取れるのは、政治に抑圧された個人の精神の痛みだけではない。政治に踏みにじられた個人の精神が、意識の外の言葉として、不意打ちのように作者に到来したという事態こそが、ここに表現されているのではなかろうか。

ここでも「潜在」の意味は二重化されているというべきである。傷ついた暗い精神を描き公開は望めないという意味で「潜在」であると同時に、表面上の意識の次元を超えた別の次元の言葉であるという意味でも「潜在」である。じつは中国語では「無意識」を「潜在意識」という。「潜在創作」には、いわば無意識を表現した創作活動という意味も認められる。

中国現代文学における「潜在創作」が、中国の歴史に根差した特殊な文学現象であることは疑いない。毛沢東時代の強力なイデオロギー統制と、水面下での盛んな「民間」創作活動の相補関係が、「潜在創作」の基盤である。しかし同時に注目すべきなのは、「潜在創作」には無意識の表出という一面があることである。灰娃のような個人の無意識の表出の場合もあれば、胡風のような、文化的な意味で抑圧されていた無意識の表出という事例もある。おそらくここにこそ、「潜在創作」という奇妙な「書く」行為の意味が読み取れると思われる。他者に向けて公開するためではなく、無意識の表出として言葉

を「書くこと」、それが「潜在創作」なのではなかろうか。水面上の言葉では決して表現できない内容を、無意識から到来した言葉によって書きのこすこと、同時代の他者に伝達するためではなく、無意識の言葉を残すために「書く」こと、ここに「書くこと」のもう一つの意味を読み取っても、誤りではないだろう。

言うまでもなく、無意識の発見はすぐれて近代的な出来事である。無意識の発見以降、近代文学はその姿を変えたと言っても過言ではない。無意識を言葉に書き残し、創作作品とした「潜在創作」は、中国の歴史に根差した形で、近代文学を実践した一つの形と言うこともできる。西洋の近代とは異なるものの、近代としか言いようのない「中国近代」の経験を探る一つの糸口が、「潜在創作」には含まれている。

(1) 陳思和「総序」(潜在写作文叢『懐春室詩文』、武漢：武漢出版社、二〇〇六)、二頁。
(2) 同上、二頁。
(3) 同上、三頁。
(4) 銭理群『毛沢東と中国』(阿部・鈴木・羽根・丸川訳、東京：青土社、二〇一二)参照。原書は、『毛沢東時代和後毛沢東時代』(台北：聯経出版、二〇一二)。
(5) 胡風の冤罪事件については、たとえば李輝『囚われた文学者たち—毛沢東と胡風事件』(千野・平井訳、東京：岩波書店、一九九六)参照。原書は、『胡風集団冤案始末』(南昌：人民日報出版社、一九八九)。
(6) 前掲、潜在写作文叢『懐春室詩文』、一六九頁。なおこの詩の解釈および毛沢東時代の旧体詩の意味については、木山英雄『人は歌い人は哭く大旗の前—漢詩の毛沢東時代』(東京：岩波書店、二〇〇五)参照。
(7) 灰娃の生涯および創作の特徴については、劉志栄「霊魂は暗夜を漫遊する—灰娃の「文革」時期詩歌創作」(鈴木抄訳、『藍・BLUE』総第二〇期、二〇〇五)参照。また灰娃の詩は、『灰娃的詩』(北京：作家出版社、二〇〇九)にまとめられている。
(8) 灰娃「路」(一九七二)、前掲、『灰娃的詩』、二—四頁。
(9) 前掲、劉志栄「霊魂は暗夜を漫遊する—灰娃の「文革」時期詩歌創作」、二一一頁、参照。